

Programming—再帰アルゴリズム—

Copyright ©2006 by Shigeto R. Nishitani

do-loopはすべて再帰関数で書き直すことができる。計算速度は一般的に落ちるが、記述が極端に簡素化される場合があるので使えると便利。

和の例

もっとも単純な和の例を示す。以下のような和を求めるプログラムがあるとすると、

```
> N:=3;
total:=0;
for i from N by -1 to 0 do
  total:=total+i;
end do;
total;
```

これを再帰関数で書き直すと以下のようになる。

```
> my_total:=proc(i)
  if i=0 then
    return 0;
  else
    return my_total(i-1)+i;
  end if;
end proc;
```

再帰関数の特徴は、

- 1 自分自身を呼び出す。
- 2 終了条件(ここではi=0)がある。
- 3 増減する引数がある。

```
> my_total(10);
```

Fibonacci数列

1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, 34, 55, ...
とつづく数列をFibonacci数列と呼ぶ。これは

$$a_{i+2} = a_{i+1} + a_i$$

で定義される。for-loopで作ると次のようになる。

```
> fibonacci1:=proc(n_max)
  local f0,f1,f2,i;
  f0:=0;
  f1:=1;
  print(f1);
```

```
for i from 1 to n_max-1 do
  f2:=f1+f0;
  f0:=f1;
  f1:=f2;
  print(f2);
end do;
end proc;
```

再帰関数を使うと次のようになる。

```
> fibonacci2:=proc(n)
  if ((n=1) or (n=2)) then
    return 1;
  else
    return fibonacci2(n-1)+fibonacci2(n-2);
  end if;
end proc;
```

だいぶ簡素化されているのが読み取れよう。

```
> for i from 1 to 10 do
  fibonacci2(i);
end do;
```

課題1

素数判定プログラムを簡素化すると以下のようになる。これを再帰関数で書き直せ。

```
> my_isprime1:=proc(n)
  local i;
  for i from 2 to n-1 do
    if (irem(n,i)=0) then
      return false;
    end if;
  end do;
  return true;
end proc;
```

引数は、(n,i)とするのが自然。

課題2

Mapleでは1000個目の素数は以下の関数で求まる。

```
> ithprime(1000);
```

以下のようにして計算時間を計り、for-loop版とrecursive(再帰)版でどの程度の差となるかを比べよ。

```
> s:=time();
my_isprime1(7919);
time()-s;
```